

## 2 支援者に対する意識調査

ここでは、ボランティアとして被災地に赴いて活動したり、避難者の方々に対する支援活動をしたという経験のある方を対象に行った意識調査の結果を取り上げる。

### 2-1 調査の概要

#### (1) 調査の目的

調査の目的は、調査票表紙に述べた下記のとおりである。

「調査の目的は、東日本大震災発生以降、被災地や被災されたの方々に対してボランティア等の支援をされた方々より、支援の際の方言に関わる状況やご意見をお教えいただき、今後に役立てることにあります。皆さまよりいただいた情報をもとに、大きな災害等が起こった場合のことば（方言）の果たす役割について分析・考察し、ことば（方言）の面から将来に役立つ情報提供や提言を行っていきたいと考えております。」

#### (2) 実施時期と方法

2012年11～12月に直接または調査協力者経由で調査票・参考資料等を配布し、2012年11月～2013年2月上旬までに配布と同様の方法で調査票を回収した。調査協力者は、茨城大学・筑波大学・筑波学院大学の教員と筑波大学学生の支援活動グループの皆さんである。

#### (3) 調査対象ならびに分析対象の回答者

調査対象は、ボランティアとして県内外の被災地で支援活動を行ったり、茨城県内に避難されている方々への支援活動を行ったりという経験を持つ人である。当初、大学生・大学院生（以下「学生」と略す）を対象に調査する予定でいたが、回答者の中には学生以外の方が5名いた。この5名の方の回答を概観したところ、この5名の方に顕著な回答の傾向（または、学生に顕著な回答傾向）は見られなかった。本調査の回答者は、学生以外の数が5と少ないことから、学生と学生以外との違いの有無を判断することは難しいが、学生の多くが選択している選択肢を学生以外では選択していなかったり、その逆の回答があったりということがなかったので、以下では学生とそれ以外の回答を区別しないで取り上げることにする。

#### (4) 回答数と内訳

回収できた調査票は、全体で44である。ボランティア経験者を探して調査に協力してもらったり、ボランティア経験学生の情報を持つ教員に依頼するなど調査を進めていたので、回答数は多いとは言えない。この点は、今後、調査を継続することで、より多くの回答からより客観的な分析につなげていくことが必要であろう。

回答44の内訳は、以下のとおりである。

出身地	茨城県内：21	茨城以外：23		
性別	男性：24	女性：20		
年齢	10代：4	20代：36	40代：4	
仕事	学生：39	学生以外：5（教職員：3	自営業：1	主婦：1）

## (5) 調査票

資料編に調査に使用した調査票「東日本大震災をめぐる方言問題の意識調査」（支援者対象用のもの、表紙を含めて6ページ）を示した。なお、調査においては提示資料を参照しながら回答してもらうための資料を添えた。提示資料に取り上げたのは、方言パンフレットの例、方言用語集の例、各種の方言エール、被災文化財救済や伝統文化の復活に関する新聞記事、方言に関わる新聞記事であるが、資料は省略する。

## 2-2 調査結果

### (1) 調査の内容

調査内容は、茨城県の本事業と連携して行っている宮城県の取り組みの一環として作成された調査票をもとにした、以下に示すような6つに大別できるものである。

- A 支援活動内容とその時のコミュニケーション状況
- B 支援と方言の問題、
- C 方言の問題と今後の活動
- D 方言に関するこれまでの取り組みについて（評価）
- E 文化としての方言保存・継承や方言の評価
- F 自由記述（方言にまつわるエピソードや当該の調査についての意見等）

このほか、支援内容・期間・回数と、2-1（4）に述べたフェイス項目について回答してもらった。記名は任意、その他の個人に関わることは質問していない。具体的な設問は、調査結果とともに示していく。また、資料編の調査票も参照していただきたい。

### (2) 支援の内容と回数

「支援の内容」として記入してもらったものを、おおざっぱに分けると、力仕事といった直接的な支援から学園祭での被災地の商品販売等まで、多岐にわたっている。回答者のほとんどが学生であることもあり、お祭りなどの行事を被災者と一緒に行った、といった支援が多かった。

- ・（肉体）労働支援…被災地での土砂・がれきの処理／田んぼの草刈り／海岸清掃／花壇整備／大工の手伝い（石巻市、被災者との交流目的カフェ増築）／カキ養殖用帆立貝収集（石巻市）／仮設住宅への新聞届け／がれき撤去（仙台市宮城野区）／刺し子製品事業の製作手伝い（大槌町）／漁業支援（気仙沼市）／炊き出しボランティア／名取市の海岸林を再生するプロジェクトの現場作業、ほか
- ・教育支援…福島からの避難者の方々に教育支援（幼～中）（新潟県）／小学校学童センターでの夏祭り（気仙沼市）／小学校などの教育機関でのお祭り開催／
- ・子育て支援…子育て中のお母さん達の話し相手（つくば市）／福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクトの活動
- ・傾聴・交流等…被災者の方々との話し合い／つくば市の避難者との交流会／仮設住宅でのコミュニティ支援／東北でのイベント運営や仮設での傾聴／足湯ボランティア／被災地で気球を飛ばす
- ・文化財救済…被災者宅の歴史資料のレスキュー作業
- ・その他…七ヶ浜町の仮設商店街 PR 活動／いわき市で仮設住宅の人達のニーズ調査／市民への関心喚起活動／コミュニティ新聞の発行（つくば市）／学際での気仙沼・陸前高田の品販売

支援の回数については、回答を見ると、1回または1日だけという回答は6人だけであり、複数回にわたって各地でボランティア活動を行ったり、1年以上にわたる被災文化財レスキューや避難者への支援など、継続して活動を行ったりしている人がほとんどである。中には、「平成23年4月から、気仙沼市8回、いわき市6回、つくば市数え切れず」などもあった。

支援の期間については、震災直後と考えられる2011年3月から現在までさまざまであった。

支援したところに行ったこと有無については、次のとおり。

初めて：14\*    ある：22\*    無回答：9 回

\*うち一人は「初めて」「ある」の両方を回答。

### (3) 結果と分析

調査票の設問グループA～EとFの順番にしたがって、設問とその結果を示しながら、項目ごとに、あるいは複数の項目をまとめて分析を述べていく。なお、設問グループA～Eは、さらに4～7の小設問に分かれている。

#### A. 普段の支援活動の内容と、その時のコミュニケーション状況

##### A01. 支援活動中の被災・避難者との会話の機会

01. あった 44    02. なかった 0

##### A02. (A01.で「01. あった」) どのような状況で会話したか

01. 方言の通訳・説明あり 0    02. 直接会話(方言の通訳なし) 44

《分析》 A01.とA02.から、支援者全員が、支援にあたって被災者・避難者と直接のコミュニケーションを行っていることがわかる。

##### A03. 会話の相手(複数回答)

01. 北茨城市 2    02. 高萩市 0    03. 日立市 3    04. 東海村 0

05. ひたちなか市 2    06. 大洗町 1    07. 銚田市 0    08. 鹿嶋市 0

09. 神栖市 0    10. 水戸市 1    11. 茨城県内 4

以上、茨城県の相手 13

21. 福島県 34    22. 宮城県 23    23. 岩手県 11    24. 青森県 0

99. その他 1

以上、茨城県外の相手 69

《分析》 会話の相手は多い順に、福島県の相手、宮城県の相手、茨城県の相手、岩手県の相手となっている。福島県の相手との会話が最も多いのは、筑波大学や筑波学院大学の支援者では、つくば市在住の避難者(福島県からの避難者が圧倒的に多い)が会話の相手だった場合が多かったことや、その他の地域でも福島県からの子育て世代の避難者への支援活動を行った者が多かったことによるものと考えられる。その他の地域の方との会話では、支援内容と対照させてみると、宮城・岩手や県内各地の被災地に行ってボランティア活動を行う中での会話であったようである。

##### A04. 会話を交わしたのは何歳ぐらいの方でしたか。(複数回答)

01.高年層（おおよそ 60 歳代以上）	29	02.中年層（おおよそ 40～50 歳代）	32
03.若年層（おおよそ 20～30 歳代）	23	04.高校生	4
05.中学生	5	06.小学生	23
		07.小学生未満の子ども	13

B 方言の問題（被災者の方との会話，被災地域の方言，支援活動と方言）

\*支援活動を行った地域(相手)はどちら(出身)ですか。

茨城県 3 茨城県外 42→（福島 30 宮城 20 岩手 7 他 1）

\*以下では，支援活動地域(相手)の方言についてうかがいます。

B01.支援活動などでの会話の中で，相手の方の方言が分からなくて困ったり，戸惑ったりしたことはありましたか。

01.あった 13 02.なかった 31

B01-2.（上の B01.で「01.あった」という方にうかがいます。）それはなんということばでしたか。覚えているものがあれば教えてください。 回答 5（詳細は省略）

B01-3.相手の方の方言が分からなかった時，どのように対処しましたか。

01.相手の方に聞き返した 9 02.他の人に教えてもらった（通訳） 3  
03.分からないまま会話を続けた 9 04.会話をやめた 0  
05.その他 1

《分析》 B01.と B01-3.から，相手のことばがわからなくて困ったり戸惑った経験をした人が 3 割弱いること、その人たちの多くは相手のことば（方言）がわからない時に、相手に聞き返したり、他の人に教えてもらわないまま会話を続けた経験があることがわかる。

【「茨城県または支援を行った地域」以外の出身の方にうかがいます。】

B02.「茨城県／支援を行った地域」の方言には目立った特徴があると感じますか。

(A) 01.感じる 14 02.感じない 11 03.分からない 5 04.その他 0

(B) どのような特徴があると思いますか。（省略）

B03.方言以外の話し方で，自分の地元の人と「茨城県／支援を行った地域」の人とは，何か違いを感じることはありますか。

(A) 01.感じる 10 02.感じない 19 03.分からない 6 04.その他 0

(B) どのような特徴があると思いますか。 記述あり 9（詳細は省略）

B04.「茨城県／支援を行った地域」の方言は難しいことばだと思いますか。

01.難しい 8 02.難しくない 19 03.どちらともいえない 8

B05.被災地の方には，できるだけ共通語で話しかけてもらいたいですか。

01.共通語で話しかけてほしい 3 02.方言でもかまわない 31

《分析》 B02.～B05.までの回答から、茨城県や被災地の方言には特徴があると感じている人が少なくない（14人、32%）ものの、支援を行った地域のことばとの違いを感じる人は少数派（10人、23%）となり、その方言が難しいと感じた人（9人、20%）はさらに少なかったことがわかる。その理由の一つに、支援を行った福島県をはじめとする東北地方の方言と、ここ茨城方言とが近いことが考えられる。ボランティアを行った人の半数強は茨城県外出身者ではあるが、茨城での生活の中で茨城方言に触れる機会があるであろうし、そういった経験から、方言の特色はあるものの、それが必ずしも難しさに結びつかない人がいるということであろう。ただし、少なくなっているとはいえ、5人に一人は難しいと感じていることも注目すべき数であろう。

### C 方言の問題と今後の活動

〔注記〕 この設問グループ C については、回答数を示すにとどめる。

C01. これからも被災地の支援活動を続けていく予定ですか。

01. 続ける予定だ 35    02. 続ける予定はない 0    03. 分からない 9

C02. (上の C01. で「01. 続ける予定だ」と答えた方にうかがいます。) 今後支援活動を続けるにあたって、ある程度は被災地の方言を学ぶべき(学んだほうがよい)と思いますか。

01. 学ぶべきだ(学んだほうがよい) 16    02. 学ぶ必要はない 11  
03. 分からない 9

C03. 今後、東日本大震災のような災害が起きた場合、また支援活動に取り組みたいと思いますか。

01. 取り組みたい 39    02. 取り組むつもりはない 0    03. 分からない 5

C04. 今後、新たな支援活動に取り組む際には、ある程度は被災地の方言を学ぶべき(学んだほうがよい)と思いますか。

01. 学ぶべきだ(学んだほうがよい) 13  
02. 学ぶ必要はない 13    03. 分からない 17

C05. 津波被害や原発避難のために、地域コミュニティが消滅し、その地域の方言も同時に消えてしまうのではないかという懸念があります。こうした被災地の方言を保護し、継承していくべきだという意見をどう思いますか。

01. 保護・継承すべきだ 37    02. 保護・継承しなくてもよい 0  
03. どちらともいえない 7

### D 方言に関するこれまでの取り組みについて《資料編の例、参照》

D01. 東日本大震災の被災地へ支援に来た医療関係者などのために、被災地の方言を簡単に説明したパンフレット等がいくつか作られています。被災地の支援活動を行う上で、

こうしたパンフレットは必要なものだと思いますか。 《資料例》

01.必要だ 36 02.必要ではない 1 03.どちらともいえない 7

D02.あなた自身の支援活動にとっては、こうした方言のパンフレットは必要でしたか。

01.必要だった 1 02.必要ではなかった 37 03.どちらともいえない 8

《分析》 D01.とD02.から、8割以上の多くの人々が方言パンフレットは「必要だ」と答えているが、自身の活動において必要だったと答えているのはわずか1名にとどまっており、「必要ではなかった」(37人、84.1%)が、D01.の「必要だ」(36人、81.8%)を上回っている。どのような活動をしたかとの関連もあろう。支援の場と結びつけた支援目的別方言パンフレットといったものも考えてみる必要があるかもしれない。

[注記] 次の設問D03.とD04.は回答数を示すにとどめる。

D03.今後、被災地において、被災地の方言についての情報を提供する「方言ネット」は必要だと思いますか。

01.必要だ 28 02.必要ではない 3 03.どちらともいえない 13

D04.今後、他地域においても方言についての情報を提供する「方言ネット」は必要だと思いますか。

01.必要だ 23 02.必要ではない 6 03.どちらともいえない 15

D05.被災地の方言による方言エールやスローガンは、被災地の方の力になると思いますか。

01.なると思う 34 02.ならないと思う 2 03.どちらともいえない 8

D06.「がんばろう東北」のような共通語による方言エールやスローガンについては、被災地の方の力になると思いますか。 《資料例》

01.なると思う 26 02.ならないと思う 4 03.どちらともいえない 14

D07.「がんばってや東北」「ちばりよー福島」のような他地域の方言エールやスローガンについては、被災地の方の力になると思いますか。 《資料例》

01.なると思う 27 02.ならないと思う 3 03.どちらともいえない 14

《分析》 被災地方言を使った方言エール・方言スローガンが被災地の「力になると思う」人は34人(77.3%)もいる。共通語や支援者の方言のエール・スローガンではそれよりも16~18ポイント減少するものの、被災地を応援するエール・スローガンを肯定的に見ている人が6割前後おり、肯定的である。これについては、前節末の被災者対象の調査結果を見ると、被災者・被災地の事情は様々であり、方言エール・スローガンに親しみを感じても励みになるとは言えないという結果であった。支援者においてもD06.とD07.で14人、3割以上の方は共通語・支援者方言によるものは「どちらともいえない」を選択し、その効果に懐疑的である。支援の押しつけにならない利用の仕方を考えてみることも大切であろう。

E 文化としての方言保存・継承、方言への評価 《資料編の例》

E01.震災後、被災地の文化を保護したり、被災地域のお祭りを復興させたりという取り組みも盛んです。被災地の文化の保護は重要だと思いますか。 《資料例》

01.重要だと思う 44 02.重要だと思わない 0 03.どちらともいえない 0

E02.それでは、被災地の文化としての方言についてはどう思いますか。

01.重要だと思う 40 02.重要だと思わない 0 03.どちらともいえない 4

E03.被災地の方言を保護し、継承していくことについてはどう思いますか。

01.保護・継承したほうがいい 38 02.保護・継承しなくてもいい 0

03.どちらともいえない 6

《分析》 被災者対象の調査結果（前節末の調査結果の表を参照）では、被災地の文化の保護・復興や方言の保護・継承について、被災者の方々は6割前後が「必要だと思う」としているが、「必要でない」「優先順位が違う」と回答している人も少なくない。一方、上の結果に見られるように、支援する側から見ると被災地文化の保護・復興は100%、方言の保護・継承についても9割前後が肯定している。支援する側とされる側との意識のギャップが大きい。地域で継続してきた文化や方言には、その土地その土地の暮らしの歴史が刻まれたものであり、守り継承するに値するものだとして筆者は考えている。その方法をどうするか、本事業が継続され、その課題の一つとして注目し、検討されることを望みたい。

〔注記〕以下のE項目グループについては、回答数を示すにとどめる。

E04.あなたは被災地や支援を行った地域の方言が好きですか。

01.好き 31 02.嫌い 0 03.どちらともいえない 13

E05.（茨城県出身の方にうかがいます。）あなたは茨城県の方言が好きですか。

01.好き 12 02.嫌い 3 03.どちらともいえない 7

E06.（茨城県以外の出身の方にうかがいます。）あなたは自分の地元の方言が好きですか。

01.好き 15 02.嫌い 0 03.どちらともいえない 8

F 方言にまつわるエピソードなどがあったら教えてください。また、この調査について、何かお気づきのことやご意見がありましたら、お教えてください。 回答 12

Fの回答について、以下に列挙する。なお、同じ人の回答でも内容によって分けたものがあるので、回答者数12よりも多くなっている。注目できる記述には、下線・波線等を付けた。

- ・ 方言を標準語で何と言えればいいのかわからない時がある。方言は標準語にするとニュアンスが変わってうまく伝えられないことがある。
- ・ 仕事の都合で標準語と方言を使い分けている人に話を聞く機会があった。ただ一言、「方言は落ちつく」だそうだ。

- ・子供の頃から普段使っていた言葉（いじやける）が実は茨城弁だったことを、大学に入ってから知りました。私は福島出身の方と話す機会が多いのですが、茨城弁とイントネーションも変わらないので違和感はありませんでした。
- ・方言には、人の気持ちや、温かさがそのまま表れると思う。それは、他地域の方言で被災地を応援しても同じだと思う。大切なのは気持ちで、言葉による壁は大したものではないと思う。自分の支援活動でも、皆が「ありがとう」と言ってくれるが、イントネーションが様々でも、とても楽しそうな表情をしている人ばかりで、こちらの気持ちまで明るくさせてくれる。
- ・海外に行ったとき、現地語で話すと喜ばれるように、その地域のことばで話すとお互いの距離を縮めることができると感じます。ソフト面のケア、会話の必要性も被災地ボランティアで必要とされており、相手と心的距離を近づけるためにも方言は重要な要素となると思います。ただ、優先順位を考えると、言葉は通じなくてもコミュニケーションはとれるし、支援活動はできるので、(医療現場以外は)もし、できたら必要なのかもしれないという思いです。
- ・(支援する相手と)近くなったと感じても、方言だけで気がねなくという関係にはなっていないと思う。
- ・共通の話題(子供の教育)があるので、方言が使えるかどうかはあまり重要ではない。
- ・残ることばは残るので、継承語の教育のようなことまでは必要ないように感じる。
- ・方言のある地域で育つと、たまに、方言を標準語だと思っていて、違う土地で使って通じないことがある。
- ・茨城から地元に戻ると、共通語を使ってしまうと周りからいろいろと批判されるので困る。
- ・方言と標準語のスローガンについて、そのスローガンがどこから出されているかで、イメージも変わってくると思う。例えば、地元(被災地)の市役所などから出されたスローガンでは、方言のほうが団結力が出て良いと思われる。逆に、東京や関東、関西などからでは、被災地の方言を使って、無理をしているように見えるよりも、むしろ標準語の方が、「他の地域の人も考えてくれている」というイメージを抱きやすいように思える。発信元の違いで、方言か標準語かの使い分けも変えた方がいいと考えられる。
- ・九州出身で茨城に来たが、茨城では九州の方言は珍しいので、しゃべり方がかわいいと言われる。茨城県の人には茨城のしゃべり方(訛りか)が嫌いだという人が多いが、茨城のしゃべり方をよく知らなかった私にすれば、茨城方言もかわいいと思う。お互いに、聞きなれていないからかわいいと思うのではないだろうか。
- ・福島の方と何度か、お話しさせていただいたが、特に方言を感じることはなかった。
- ・他の人に比べて、直接話すことが少なかったせいもあると思いますが、注意方言らしき言葉は出てきませんでした。
- ・方言で話す女の子は、かわいいと思います。京都弁は特に良い。

以上、支援者意識調査結果について報告した。回答数も少なく、分析を深めることもできていないが、これで本節を終了する。